

積み重ね

校正者 牟田都子
むた やすこ



撮影：足田千里

gift+presentの違いを考え始めた発端は、昨年『贈り物の本』というアンソロジーを作ったことだった。日頃から著作を読み、文章や思想に感銘を受けている書き手に、「贈り物」をテーマにエッセイを執筆してもらえないかと依頼状を送り、36篇が集まった。半年ほどの制作期間を経て出来上がった本が書店に並び始め、ようやくひと息ついたときに、存在感を増してきたのが冒頭の問いだった。

英和辞典を引けばどちらも「贈り物」には違いないが、*gift*には天賦の才の意味があるという。特定の分野ですぐれた才能を示す子どもを指す「ギフトド」という表現を、何年か前からメディアでも見かけるようになった。持って生まれた能力、適性、資質。確かにそれは、ある種の贈り物と呼べるのかもしれない。

しかし、生まれながらに備わった他者との相違が、当人にとって喜ばしいものとは限らないようにも思

う。

30歳のときに転職して出版社で校正の仕事を始めてから、「サラブレッド」と紹介されることがたびたびあった。両親が共に同じ職業に従事してきたことを知っている人の、善意から出た言葉だとわかっていても複雑だった。

校正者といっても様々で、私の親は特に国語辞典を規範的に考えるタイプだった。例えば食卓で「全然おいしい」などと口にしようなものなら、廊下に立たされるどころではすまない。正しい日本語は何をおいても守られるべきものであり、その下で正しさを踏み外さないよう、息を殺して生きるしかなかった。

在学中から親とは違う道をと志した結果、20代を公共図書館の嘱託職員として過ごした。天職とさえ思っていた職場だったが、2003年の指定管理者制度施行が一つの契機となり、離れざるを得なくな

った。女性で、シングルで、食べていくためには仕事を選んでいる余裕はなく、たどりついたのは親と同じ職業だった。そのことに自分で折り合いをつけられずにいたから、血筋といわれて反発を覚えたのだろう。

競走馬の世界とて、名馬の仔が名馬とは限らない。出版社の校閲部とは、校正をするために生まれてきたような人間が集まってくる場所だ。学歴も年齢も関係ないのがこの仕事のよいところだと先達は口をそろえるが、裏を返せば実力が絶対的のものという世界である。たまたま親が同じ仕事をしていたというだけの理由で、英才教育を受けたわけでもなく、つてを頼りにいきなり現場に飛び込んでしまった30歳は、完全なみそっかすだった。回ってくるゲラ（校正刷り）の難易度を見れば、自分の評価がどの程

度なのか、知りたくなくとも思い知らされる。親の七光といわれないためには、力をつけるしかなかった。過日、政治家が長時間労働を美徳とするかのような発言をして抗議を受けていたが、私自身、ひところはそのような「美徳」を内面化していた。それくらい必死にならざるを得なかったからこそ、いまの自分がある。でも、この出自を、ひどく持ち重りのする割に下ろすことを許されない荷のように感じてきたことも事実だ。

代々文筆業の家に生まれ、自身も同じ道に進んだ方と、雑誌の企画で言葉を交わす機会があった。代々と聞けば家業のようだが、継いだつもりはないのだと、著書の中で漏らしておられたことが頭にあった。あくまでも、おのおのが独立した一個人としての意思に基づき筆をとる決断をした結果であって、それが幾人か続いただけなのだ。対談を終えたあと、血で仕事ができたらこんなに苦労していませんよねと水を向けると、うなずいてくださった。社交辞令であったかもしれないにせよ、慰められる思いだった。

老舗、名跡の何代目というような肩書きを背負って仕事をしている人は、どのような分野にもいるものだ。一見華やかな看板の陰に隠れてしまいそうな、その人自身の積み重ねてきた時間を、せめて自分は見失いたくはない。

時の調べ Essay

略歴
1977年、東京都生まれ。図書館員を経て出版社の校閲部に勤務、2018年より個人で書籍の校正を行う。著書に『文にあたる』（亜紀書房）、『校正・校閲IIの現場 こんなふうに読んでいい』（アノニマ・スタジオ）、共著に『あんぱん ジャムパン クリームパン 女三人モヤモヤ日記』（亜紀書房）、『本を贈る』（三輪舎）ほか



発行：亜紀書房